

遍路文化を生かした地域力向上への提案

— 歩き遍路の体験から —



愛媛県立川之江高等学校 3年

曾根紀香

I. はじめに

高野山真言宗の寺に生まれ、毎年寺の団体参拝で巡拝に出る人達を見てきたからか、私もいつか四国遍路をできれば歩いて巡ってみたいと思っていた。区切り打ち・休日遍路という方法があることを知り、とにかく挑戦してみようと、妹と二人、第一番札所霊山寺を出発した。不安だらけで始めた巡拝だったが、巡拝 1 日目から、その日出会った人達への感謝の思い、その人達に出会えた幸福感、その人達に出会えた町の魅力に興奮しっぱなしだった。そして、私が受けた「見返りを求めずにすべての人を受け入れる【お接待】」という行為には、人を変え、地域を変え、社会を変える大きな力があるに違いないと実感した。と同時に、遍路文化の活性化が、私の住む地域が今抱えている地域コミュニティの衰退という問題を解決する手だてになるのではないかと思い、仮説を立て提案することにした。

— お接待とは —

四国の人々にとって、【お接待】には、もともと「お大師様と一緒に四国遍路を旅しているお遍路さんをもてなすことは、お大師様をもてなすことと同じである」「お接待をするという行為で徳を積むことができる」「自分の代わりにお参りをしてもらう」というような意味がある。また、お遍路さんへの慰労、自分が受けたお接待への返礼としての意味で行われるお接待もある。地元の人々は、お接待として、お遍路さんに飲食物や金銭を手渡したり、宿泊の世話等、行為でもてなしをしたりしてきた。私は、地元の人がかけてくれる挨拶や声掛けも、お接待とらえている。

II. 私の住んでいる地域が抱えている問題

私の住んでいる四国中央市妻鳥町中下地区は、かつては田畑の多い農村地区であった。2・3 日姿の見えない人がいると気になって様子を見に行ったり、祭りや葬式・地域の行事の時には、年配の人たちの指導の下、伝統を守りながらみんなが協力し活動したりしてきた。そんな昔ながらの地域コミュニティが地区の人たちの誇りだった。

1985年に高速道路のインターチェンジができると、辺りはすぐに市内一番の商業地域となり、田畑には次々と住宅が建って、たくさん新しい世帯が増えた。【165戸(1986年) ⇒ 412戸(2018年)】そして、誰もが顔見知りだった地域が、あっという間に近所に誰が住んでいるのかわからないという状態になってしまった。

このままではいけないと、新しい世帯の人が参加してくれることを願って、地区会では、もちつき大会・お楽しみ会等いろいろと企画しているが、新しい参加者はほとんどなく、役員の人達は頭を悩ませている。秋まつりの太鼓台のかき手も、世帯数の増加に反して減少しており、人集めに苦労しているという状態だ。

III. 遍路道をめぐるコミュニティ（私の遍路体験より — 阿波の国）

地図を見ながらへんろマーク(写真1)を頼りに歩くその道中は、驚きと感動の連続だった。通りすがりの子供達が皆、あいさつしてくれる。すれ違う車の人が皆、会釈してくれる。中には、わざわざ車を降りて、「がんばって。」と、あめを手渡してくれる人もいる。出会う人みんなが声をかけ、あいさつしてくれる。道に迷ったままどンドン歩いていると、追いかけて教えてくれる。曲がり角で悩んでいると、畑仕事をしていた人が、身振り手振りで道を教えてくれる。



(写真1)

その日の夜、泊まった宿坊のお坊さんとお話させてもらった時、みんなが声をかけてくれたり、助けてくれたりした事に驚いたと話すと、「この辺は札所が多く、よくお遍路さんに出会うので、昔から家族や近所の人々がやっていたことを、当たり前に行っているんだと思いますよ。」と教えてくれた。その後も、お腹が痛くてつらそうに歩いている妹を見た人が、家で休んでいくよう声をかけてくれたり、台風並みの雨風が一日中続き、もうやめたいと思いつつ歩いていると、自転車に乗った学校帰りの中学生が「がんばってください。」と声をかけてくれたり、その言葉のおかげで、何とかあきらめず阿波一国を歩き通すことができた。



(写真2)

また、雪の山道の途中、寒すぎて食事をとれずに困っていた時や日ざしがきつく歩き疲れた時に出会えるへんろ小屋(地域の人、企業の好意で設置されている)は、本当にありがたい休憩所だった。(写真2)自分が巡拝できなくなってしまったので今度はお接待する側になると、へんろ小屋を作ってお接待を続けている男の人や、廃校になった学校を交代で管理して、コーヒーやトイレの接待をしている地域の活動(写真3)にも助けられた。家や店の脇を休憩所として自由に休めるようにしてくれているところもある。(写真4) 遍路道には、お遍路さんを助けたり励ましたりするための看板や張り紙、地図もあちこちに見られた。

(写真5) (写真6)



(写真3)



(写真4)



(写真5)



(写真6)

そして、行政がお遍路さんを迎え入れるために行っている対策もいろいろと見ることができた。(写真7・8)

遍路道は、あらゆる人を受け入れる温かなコミュニケーションにあふれた雰囲気にもまれ、遍路道をめぐるコミュニティには、安心・信頼の環境が整っていた。その中で、私達もいつしか自然とそのコミュニティの一員として人々と接し、その町が大好きになっていった。

IV. 遍路文化の活性化が、地域力を向上させるという仮説

1. 地域力衰退の原因と考えられる要因

- (1) 自分達がこのコミュニティの一員であるという意識が低い。
- (2) 地域についての知識が少なく、また、地域に対する関心が低い。
- (3) 隣近所とのつきあいを好まない人が多い。
(価値観の違い・コミュニケーションの体験不足)



(写真7)



(写真8)

2. 遍路文化を活性化させ、1の原因を解決する方法とその効果

四国中央市には札所の寺が一ヶ寺しかなく、地元には遍路道が通っていない地域が多い。そのため、遍路文化の衰退が著しく、活性化はなかなか難しいと考えられる。そこで、学校・PTA・愛護班・公民館・行政・企業等による以下のような企画や活動を提案する。

(1) 地域の遍路文化の歴史や伝統を学習する企画

自分たちの住む四国中央市には、四国八十八ヶ所霊場第65番札所三角寺があり、そこにつながる遍路道には、古くからお接待という伝統的な心の文化が根付いているということを知ることが大切である。その文化の歴史や伝統を知ること、自分達の住む地域に誇りをもち、地域をもっと好きになることができ、地域への関心も強くなる。

(2) お接待体験の企画

お遍路さんと実際にふれ合うことで、コミュニケーションに慣れると同時に、その楽しさを知る。また、人に喜んでもらうことの喜びを知ること、まわりの人達に関心をもち、自分のできることをしたいという意欲が起こる。そして、地域のみみなでお遍路さんをお接待することにより、地域への所属感を実感し、自分達の地域の良さをアピールしたいという思いから、地域をもっとよくしようという意欲も高まる。また、歩き遍路への関心にもつながっていく。

(3) 歩き遍路体験の企画

自分のまわりの自然や人々に対する感謝の思いをもち、コミュニケーションの喜びを知る。また、まわりの人々に見守られているという安心感や信頼感から地域コミュニティの大切さを実感することもできる。そして、接待される喜びを知ることが、自分も人の喜ぶことをしたいという意欲や実践につながっていく。

(4) 行政や企業による環境づくりや広報活動

上記の(1)(2)(3)の活動を企画・提案すると共に、掲示物等による環境づくりやSNS等による広報活動により、遍路文化に対する人々の関心を高める。

V. 地域の現状

1. 公民館の活動

(1) 市内の20ヶ所の公民館(2つの分館を含む)に電話で聞き取り調査を行う。

- ・ 三角寺での6年生お接待体験を地域をあげてやっている。 — (1ヶ所)
- ・ 公民館ではしていないが 自治会で遍路道にかざる花をプランターに植えている。 — (1ヶ所)
ふれあいサロンでお遍路休憩所の掃除をしている。 — (1ヶ所)
- ・ 特にしていない — (17ヶ所)

特に何もしていないという公民館がほとんどで、遍路道のある地域でも活動しているところは少なかった。

そんな中で、お接待体験を実施している金田公民館の活動について調査した。

(2) 金田公民館の南小学校6年生お接待体験についての調査



(写真9)



(写真10)



(写真11)

〈事業について〉

14年前から、毎年四国中央市立南小学校の6年生が、婦人会・更生保護女性会・交通安全協会等地元団体の人達と年に一回、三角寺でお接待体験をしている。6年生は、事前に遍路文化について調べ学習する。(写真9)そして、接待品を準備し、お遍路さんにお茶やお菓子の接待をする。(写真10・11)児童は2班に分かれ、お接待したり、住職さんによる寺や遍路文化についての説明を聞いたりする。後日、調べたことやお接待体験について、下級生の前で発表する。

① お接待体験を企画した鈴木担さん(元金田公民館長)へのインタビュー

Q. どういう目的で企画されましたか

A. 子供達に、地域にある礼所三角寺や遍路文化の歴史・伝統について知ってもらい、地元で昔から根付いていたお接待という心穏やかで大切な文化を受け継いでいってもらいたいと考えた。また、公民館の学習教育ということで、学校と地域との関わりが深まることを期待した。

Q. 活動を始める際、苦労したことはありましたか

A. 学校が積極的に取り組んでくれた。いろいろな団体も率先して準備やお接待に参加してくれた。三角寺の住職さんにも大変お世話になっている。

Q. 活動を始めてみてどうですか

A. お接待の場は、知らない人や地元の方々と、子供達がコミュニケーションすることができる場となった。いろいろな組織の人や子供達と活動することで、お互い顔見知りになり、地域でこの子供達を育てていこうという意識が強くなった。そして、お遍路さんが喜んでくれることが子供達の喜びとなったことで、きっとこのお接待の文化は、次の世代へと受け継がれるだろうと思う。

お接待の活動の話聞いて興味をもち、お遍路さんの休憩所をつくった人がいる。

② お接待体験をした南小学校 6年生(36名)へのアンケート

Q. どんな気持ちでお接待しましたか

A. 第1位 お遍路さんに喜んでもらいたい
第2位 お遍路さんを元気づけたい
第3位 お遍路さんにここはいいところだと思ってもらいたい

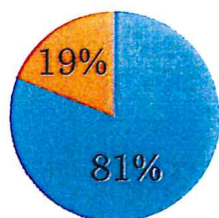
Q. お接待を体験してどんなことを思いましたか

A. 第1位 お遍路さんに喜んでもらってうれしかった
第2位 お遍路さんと話ができてうれしかった
第3位 また、お接待をしたいと思った

Q. お接待を体験した後、何か自分が変わったと感じますか

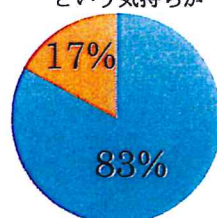
A. 「あいさつができるようになった。」「お遍路さんに会ったら、声をかけて大きな声であいさつするようになった。」「いろいろな人と話せるようになった。」「困っている人を助けたいと思うようになった。」「心が温かくなった。」

あいさつについてお接待体験の後



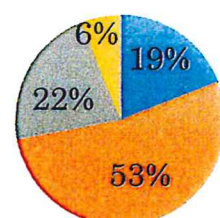
■前よりできるようになった ■変わらない

何か人のためにしたいという気持ちが



■強くなった ■変わらない

自分も歩き遍路を体験してみたいですか



■是非してみたい
■機会があればしてみたい
■興味はあるがわからない
■したくない

〈検証〉

- お接待体験をした子供達は、お遍路さんとのコミュニケーションの中で、コミュニケーションに慣れ、コミュニケーションを楽しみ、人の喜んでくれることができたことへの喜びを体感することができた。
- 遍路文化について、毎年6年生が学習体験をし、それを下級生達の前で発表することで、子供達の中に、お接待文化が自分達の受け継ぐべき伝統であるという自覚が生まれている。
- お接待体験の場が、地域の人同士のコミュニケーションの場となり、コミュニティの一体感やコミュニケーションの大切さを実感できる場となっている。
- お遍路さんをみんなで受け入れるという行為により、自分は温かいコミュニティの一員であるという誇りを持ち、より自分の所属しているコミュニティを好きになることができています。

2. 市役所や企業の活動

(1) 遍路文化の活性化と関わりのありそうな市役所の課を訪ねて調査を行う。

- 〈文化・スポーツ振興課〉 遍路道の史跡指定ができればと思っているが、できていない。イベント的なことも何もできていない。
- 〈政策推進課〉 「四国遍路の世界遺産登録」に向けてアピールする活動をしなければと考えてはいるが、県からの指示待ちというところで、まだ何も活動していない。
- 〈建設課〉 市道になっている遍路道の保全是行っているが、他に活動はしていない。
- 〈観光交通課〉 遍路道のトイレ掃除をしている人に手当を出している。

【検証】 四国遍路の世界遺産登録に向けて、指示待ちという状態の課がほとんどだった。
行政がいろいろな企画・環境づくりをすることが、遍路道のない地域への遍路文化普及につながると考えられる。

(2) 企業の活動

徳島の巡拝をすべて終えた時点で、地元の遍路道を調査する為、二日間かけて、前神寺から三角寺、徳島との県境を目指し歩いた。

① 信用金庫が建てた遍路休憩所

西条市 前神寺から徳島との県境までの間に、2つの信用金庫が、地元の遍路道に4ヶ所の休憩所を建てていた。

〈2つの信用金庫への取材〉

- ・ 地元密着型の金融機関ということで、地元貢献のために建てた。
- ・ 「お遍路さんに地元の道に入ってきて欲しい」「店の名前を憶えてもらえる」等の思いもある。
- ・ 年2回のお接待も行っている。

② 川の江ロータリークラブの会員による休憩所

川の江ロータリークラブによる休憩所の旗を立て、自宅の一部をお遍路休憩所として提供しているところがあった。(写真12)

遍路道以外の企業建物にも何ヶ所か立てられている。



(写真12)

【検証】 いろいろな組織が行っている遍路文化活性化の動きを受けた企業の実践が、もっと地域に知られたり広がったりするような広報活動があれば、地域を動かす力になると思われる。

VI. まとめ

今回の体験や調査を通して、遍路文化の活性化は、人とのコミュニケーションの輪を広げ、コミュニティの絆を深めるということを実感することができた。特に、「させていただく」というお接待の姿勢は、地域活動への積極的な参加を促し、地域力を向上させる。また、遍路文化の歴史の素晴らしさを知ること、自分達がそれを受け継いでいくんだという誇りは、地域への愛着や帰属意識の高まりへとつながっていく。

今回、地元の遍路道でも、宿泊や休憩ができる個人で建てた遍路小屋を見つけお世話になった。(写真13・14)車から降りて家で採れたサクランボをお接待して下さる方もいた。また、道案内もして下さった。私達の地域にも温かい遍路文化が息づいていることを知り嬉しかった。(写真15)私と妹の二人で、休日の朝、信用金庫さんの休憩所でお接待を始めた。6月には、川の江信用金庫さんのお接待に誘ってもらい、一緒に活動させてもらう。私の小さな活動の範囲が少しだけ広がったような気がした。(写真16)

地域力を向上させる為には、遍路文化活性化へのそれぞれの実践の輪がどんどん広がっていくことが必要だ。そのためには、行政に働きかけながら、個人や組織が横のつながりを持ち、情報を共有しながら、お接待の心を広める活動を企画していかなければならない。四国中央市民を遍路文化の世界に巻き込んでいきたい。



(写真13)



(写真14)



(写真15)



(写真16)

〈参考文献〉

- ・ 金森早苗 (2016) 『四国八十八カ所をあるく』 JTBパブリッシング・愛媛県生涯学習センター (2003) 『遍路のこころ』 愛媛県
- ・ 宮崎建樹 (2016) 『四国遍路ひとり歩き』 へんろみち保存協力会
- ・ 森 正人 (2014) 『四国遍路 ハハケ所巡礼の歴史と文化』 中央公論新社
- ・ 愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会 (2013) 『巡礼の歴史と現在—四国遍路と世界の巡礼—』 岩田書店
- ・ 佐藤久光 (2013) 『四国遍路の社会学—その歴史と様相—』 岩田書店
- ・ 『地域力』 ウィキペディアより <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E5%8A%9B>